

---

# トールルの鐘

クォーツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トールルの鐘

### 【Nコード】

N4427Y

### 【作者名】

クオーツ

### 【あらすじ】

あの日、俺は全てを失った。

そして、誓ったんだ。俺が何もかも変えてやるって。

----- 大切なものを奪われた青年は、復讐の道で何を思うのか。

これは、孤独な戦いに身を投じた、ある一人の男の物語



## プロローグ（前書き）

この作品は、あまり頻繁に更新出来ないと思いますが、よろしくおねがいします。

## プロローグ

目の前に広がっている光景は、まるで地獄だった。辺りはどこも血に塗れていて、鼻がむせ返るような濃い臭いが漂ってくる。

その臭いの出どころは今なお増え続けている。

おそらく、どこかの騎士団が正式採用している物なのだろう。随分としっかりしていて、強度の高そうな鎧を着た、兵士と思しき人間が、集落のみんなを追いかけ回して殺戮している。

逃げ惑う人々。捕まってしまい、大きな氷柱のような物で串刺しにされている人や、全身が焼け焦げて生き絶えている人、さらには巨大な岩に押し潰されている人も見える。

中には敵と応戦している者もいる。そして、相手を確実に討ち取ってもいるのだ。

だが、明らかに人数が違いすぎる。これでは、いくら頑張ったところで全滅は目に見えている。

しばらく、集落の入り口の辺りから、その光景を呆然と見ていた俺だったが、どこかに隠れたりしなかったのは流石にまずかった。

どうやら、敵の一人に見つかってしまったようだ。その大きな鎧を着た兵士が、何事かを叫びながらこちらに向かってくる。

「おいっ、まだあそこに生き残ってる奴がいるぞ！」

「なんだ、まだ子どもじゃないか。あんなもん余裕だろ。俺が行ってくる」

しかし、そんなことは俺の目に映ってもいなかった。

今、俺の視線の先にある幾つかの物。いや、あれは“者”だ。ぱっと見は赤黒い肉塊だがそれにはどうやら手足や顔らしいものが付いている。それはたしかに人間だった。

そして、あの肉塊達についているお揃いのブレスレッド。あれは、先月妹の誕生日にと俺が作った物だ。どうせなら家族みんなの分をと思い、自分の物も入れて四つ作った。

それが、三つある。あの肉塊に三つについているのだ。

そのの意味するところが分からない程、俺は愚かではなかった。いや、いつそのこと分からなければ良かったのかもしれない。

俺は何も考えずに肉塊に走り寄った。どうやら後ろから先程の敵が迫ってきているようだが、そんなことはどうでもいい。

ただ、鎧の出すガシャガシャという音が耳障りなだけだ。

俺はそれを無視して肉塊の側に膝をついた。

肉塊に呼び掛けてみる。だが返答は無い。今度は少し強めに揺さぶってみる。だが、それでもやはり反応が無い。

もう何がなんだか分からない。つい数時間前までは、ごく普通の幸せな集落だったのに……。

ふと何者かの気配を感じて振り返ると、後ろに俺を追いかけて来ていた兵士が立っていた。

俺に向かって何か怒鳴っている様だが、何も耳に入っていない。

むしろ俺の耳からは、音という物が凄まじい速さで消えていく。

もう何も聞こえない。

ただ、一つだけ分かったことがある。

今、俺は怒っているのだ。脳が沸騰しているのではないかと思うくらい、怒っている。

こいつらは、俺の日常を奪っている。もう元には戻れないだろう。こいつらのせいで全てが変わってしまった。こいつらのせいで……。

もう、我慢できない。俺に向かって剣を振り下ろそうとしている兵士に向かって、俺は手を向ける。

そして、叫んだ。

「……白鴉！」

その瞬間、俺の手から眩いばかりの白い光が迸った。その光はばちばちと物凄い轟音を発しながら、光線のように敵に向かって直進していく。

そして、それは俺の手の先にいた、剣を振りかぶったままの兵士の腹を貫き、そのまま後ろの地面にぶつかる。

まるで何かが爆発したかのような大きな音が、辺りを満たした。光が着弾した辺りの地面は黒く焼け焦げ、大きく抉れている。

あの兵士は死んでしまったのだろうか。死んでしまったのかも知らない。

だが、別に罪悪感を感じたりはしない。あいつらは殺されても文句の言えないようなことをした。むしろ、本当にいい気味だ。

そう思った瞬間、俺の体が傾いて、地面に倒れこむ。だんだん意識が薄らいでくる。今、俺が使える限界の魔術を使ったのだから、魔力が切れてしまったのだ。

消えていく視界の中で、何人かの兵士がこちらに向かってくるのが見える。さっきの魔術が起こした音を聞いたのだろう。

このままでは俺は確実に殺されるだろう。それで、構わない。もう自分には何も残っていないのだから。

「父さん、母さん、アリス……。俺ももうすぐそっちに行くよ……」

そう呟いた瞬間、俺の意識は闇に落ちて行った。



## 第一話 一触即発（前書き）

（主人公が使う魔術を変えました。他の方の小説と少しかぶったので。）

そういうことで、今後ともよろしくお願いしますm┐┐┐m┐┐┐

と、過去に書きましたが、そんなことを言っていたらきりがないので、やっぱり元に戻します。すみませんでした。

## 第一話 一触即発

今俺が立っている場所は、この大陸のほぼ南半分を治めるエインガルズ王国の王都であり、最も巨大な都市、アーステイル。その中心部にある、かなり立派な王城の城門前だ。

そこで俺は、俺の師匠と別れの挨拶をしていた。

「それでは、見送りはここまでです。ここから先は、ラトス一人で行ってください。必ず目的を達成して下さいね」

「はい、師匠。

どんなことがあっても、絶対に達成してみせます。

……こんな国、俺が壊してやります」

俺がそう言うと、師匠はため息を吐いた。たしかに、こんなに人がいる所で言うことじゃあ無かったかもしれない。

そんなことを思っていると、師匠が俺を見てまたため息を吐いた。どうやら師匠が言いたかったことは、そういうことじゃあ無いらしい。

「ラトス、たしかにこの国は腐っています。もう、どうしようも無い程にね。

でも、これだけは忘れないで下さい。この国にはたくさんの罪無き

国民がいることを。

あまり派手なことをしぎると、多くの人に影響が出ますよ。  
これからは、賢明に動いて下さいね」

「分かってますよ。俺は無関係の人を傷付けたりは絶対にしません。  
そんなんじゃないあ、あいつらと何も変わらないから……」

「分かっているのならいいんですけど」

また嫌なことを思い出してしまった。あの、血に塗れた一日のこ  
とを。

俺はあいつらを絶対に許さない。必ず引きずり出して、然る<sup>しか</sup>べき  
罰を受けてもらう。

「そんなことより、今大事なのは試験ですよ。これに落ちたら全て  
台無しですからね。頑張ってくださいよ。」

まあ、ラトスの実力ならそう難しいことでは無いと思いますけど」

黙り込んでしまった俺をじっと見ていた師匠は、口を開くと俺に  
応援の言葉をくれた。

そつだ、この試験に失敗することは絶対に許されない。気を引き  
締めて臨まなければ。

「はい、頑張ります。」

そして、この国は俺が絶対に変えてみせます。師匠は安心して見て  
いて下さい」

「ええ、私もその瞬間を待ち望んでいますよ。」

ああ、それとあなたに言っておかなければならないことがあります」

師匠は、大事なことを忘れていた、とでも言いたそうな表情で一つ付け足してきた。

「あの焰は、出来るだけ使わないようにして下さいよ。

知っている人がいたなら、あなたの素性がばれることもあり得ますから」

たしかにそれはあり得ないことではないし、もしそうならばかなりまずい。正直、あれが使えないのは結構痛いけど仕方ない、か。

「分かりました。気を付けておきます。

それじゃあ、そろそろ時間なので、行ってきます」

俺のその言葉でもう時間が差し迫っていることに気付いたらしい師匠は、急に焦り出しながら俺に向かって言った。

「本当です！ もう試験開始の時間まで一時間もありませんよ！早く行かなくては失格にされてしまうのでは？ さあラトス、もう行かないと」

師匠のその焦りように、俺は思わず笑ってしまった。

だって、あの普段は常に冷静沈着な師匠が焦ってるのなんて、滅多に見られるものじゃあ無い。

俺がクスクス笑っているのに気付いた師匠は、一瞬苦り切った表情を浮かべた後、もう一度俺を急かした。

「ほら、本当に遅れてしまいますよ。こんなしょうもないことで失格にされてしまったら、許しませんからね」

たしかにもう結構ぎりぎりの時間だ。そろそろ行くとしよう。

「大丈夫ですよ、師匠。」

それじゃあ、もう行きますね」

「はい、ラトスならきつとどうにか出来るでしょうし、あまり心配はせずに待っていますよ。」

じゃあ私ももう、うちに帰りますね。

ラトスは全て終わらせるまで帰ってきてはいけませんよ」

師匠はそう言つと、俺の背中を押して、城門の中に思い切り突き飛ばしてきた。

「いつっ……」

文句を言おうと、後ろを振り返った俺の口から出たのは、文句では無く、ため息だった。俺の視界の中から、師匠はもう消えていたのだ。

やっぱり、いつ見ても師匠の身のこなしは半端ではない。

あんなに強い師匠が田舎で農家の真似をしてるなんて、究極の宝の持ち腐れだと思うのは俺だけなんだろうか。

まあ、そんな師匠が作る野菜が予想外にうまいのは、ごく愛嬌といったところか。

「おっと、しょうもないことを考えてたうちに、時間が本格的にやばくなってる」

腕時計を見てみると、試験の時間まで後三十分もない。試験会場まで走って行かなくては。

「ふう、とうとうこの場所まで来たんだ。絶対にみんなの仇は取ってやる……」

俺は少し後ろ暗い決意と共に、王城の敷地内にある会場に向かって走り出した。

会場に到着した俺の目に飛び込んできたのは、大きな闘技場のような建物だった。

入り口の横に立て掛けられた板には“第一訓練場”と書かれている。

おそらく、兵士達が訓練をする時に、使用する場所なのだろう。その規模は、数百人の兵士が入っても大丈夫そうなくらい、大きい。

入り口からは、何人かの屈強そうな男達が入って行く。試験の受付は中するのだろう。

いつまでも外で突っ立っていたって仕方ないし、俺も中に入ろう。何故か周りの男達にじろじろ見られているような気がするし。

「うわ……中も凄いな。これ、どれだけお金かかってるんだろう」  
入り口から中に入ってるみると、ロビーのような空間が広がっている。だが、凄いのはその内装だ。

流石王城、とでも言えばいいのだろうか。床は恐らく大理石だし、天井からはシャンデリアが吊り下げられている。

「ここ、兵士の訓練場だよな？ こんな豪華にする必要あるのかな……？」

「おい、なにぼーっと突っ立ってんだよ。邪魔だろうが」

俺が呆れていると、後ろから誰かに声を掛けられた。だがそれは、とてもじゃないが友好的とは言いがたいものだった。

もう少し言い方ってものがあるだろう。

少し頭にきたがここで無駄な争いを起こしてしまったら、後々面倒だ。俺は振り返って無難な返事をした。

「ああ、ごめんなさい。直ぐにどくよ」

後ろに立っていたのは、長年使い込んだのだろう、すっかり体に馴染んでいる革鎧を着て、腰には大振りの大剣を下げている、いかにも、といった感じの男だ。

そいつは振り返った俺の顔をじろじろ見ていたかと思うと、急に笑い出した。

一体なんなんだ？

「おいおい、なんだよその面は。ここはお前みたいな優男がくる所じゃないぜ。」

さっさと帰らないと痛い目みるぞ？」

男が大きな声でそう言った途端、周りにいた他の男達の何人かからも笑い声が漏れた。

全く、どこにでもしょうもない奴はいるもんだな。

俺がそんなことを考えていた時だ。男達の下卑た笑いに、鈴のような綺麗な声が混じってきた。

これは……女の子だよな？

「ちよつと、あ、あなた達一体なんなの？　そういう失礼なことを言うなら他でやってよ。みんな真剣にここに来てるんだから」

その言葉の主は、やっぱり女の子だった。俺より少し年下かな？　恐らく十六、七歳だろう。可愛らしい顔をしているし、体も随分と華奢だ。そして、亜麻色の長い髪を後ろで一つに纏めている。

正直こんな所には似つかわしくない子だな。

彼女は何故かは分からないが、どうやら俺を擁護してくれているようだ。このまま、見ていただけでいいものだろうか……。

俺が彼女を長々と観察していた間、あの男も同じことをしていた



らしい。

しばらく口を開かないと思ったら、先程よりも大きな笑い声を上げて彼女に向かって口を開いた。

「なんだなんだ、優男の次はガキか。お前ら試験を舐めてるのか？  
ここは、俺のような選ばれた者が来る場所なんだよ。  
遊び気分なら帰れ」

男がそう言った後、手の骨を鳴らして女の子を威嚇している。

あの女の子も元々、別に気が強いという訳ではなかったらしく、  
怯えてしまっている。

全く、怯えるくらいならそもそも何であんな啖呵を切ったりする  
んだか。ここで俺が出て行かなくちゃ、まるで臆病者だな……。

あんまり目立つなって言われてたけど、この場合は仕方ないよな。

「おい、あんた女の子に向かってそんなことして、恥ずかしくない  
のか？ 最初は俺に突っかかってた癖に、そっちに逃げる訳？」

ああ……俺、こんなこと言うキャラじゃないんだけどな。

「何だと、おい。もう一回言ってみろっ！」

俺がちよつと挑発した途端、男が切れた。拳を振りかぶってこちら  
らに向かって来る。

周りにいる奴らが、流石にやばいんじゃないのか、などと呟いて

いるのが聞こえる。そう思うなら止めればいいんじゃないかと思うのだが、そんな度胸のある奴はいないらしい。

ふと気付くと、男の拳が目の前に迫ってきていた。近くである女の子が息を呑む音が聞こえる。

まあ、別に避けるのは簡単そうだけど、後から「こちゃこちゃ言われると面倒だから、ちょっと眠っててもらおう。

もうあと数センチで俺の顔に拳が当たる、という距離まで男が近づいて来た時、俺は男に人差し指を向け、周りに聞こえるかどうかという大きさの声で呟いた。

「こうらい招雷」

「うっ！」

その瞬間、人には認識出来ないであろう短さで、一瞬の放電が起こった。相手のごく近くで、ほんの少しの間だけ発動させた魔術。

まあ、誰かに気付かれたということも無かっただろう。少し、やり過ぎたような気もするけど、天罰だと思って成仏してくれ。

男は、剣が床にぶつかるやかましい音を立てて、崩れ落ちる。

俺は、その場に倒れ込んで時々痙攣している気味の悪い男を放ったらかし、そのまま受付に向かうことにした。

## 第二話 試験官登場

「さて、受付も済ませたし、後は試験開始を待つだけだ」

その後受付に行き、試験参加の登録を済ませた俺は、さっきのロビーにあったベンチに座っている。

後十分程すると、担当の者がやって来て、参加者を訓練場の訓練スペースに移動させるらしい。そして、そこで試験の内容が発表されるのだ。

俺は、試験に向けて精神集中でもしていることにしよう。

……誰かこっちに近付いて来るな。

「あの、さっきはありがとう。お陰で助かったよ」

こちらに近付いて来る人がいると思ったら、俺のすぐ前で立ち止まる。そして、何処かで聞いたことがあるような声でお礼を言われた。

ん？ 今、もしかしなくても俺がお礼を言われたよな。

「あ、さっきの勇氣ある女の子」

「ゆ、勇氣ある女の子って……」。

あ、それよりも、さっきは本当にありがとう。危うく試験開始前に試験に出られなくなっちゃったところだったよ」

どうやら先程の件で、俺にお礼を言う為に来たらしい。

でも、あれはそもそも何故かは分からないが、彼女の方が俺を庇うようなことをしたのが原因だったはずだ。

それならば、ここは俺も礼を言うべきなのだろう。

そう思った俺は、こちらからも感謝の意を伝えることにした。

「いや、そんなことは全然いいよ。

それよりも、君、最初に俺を庇ってくれてたよね。こっちこそありがとう。

でも、ああいう輩やから相手に、あんまり今回みたいなことは、言わない方がいい。目を付けられると後々面倒だから」

「うん、それは分かってるんだけど……」

彼女はそう言うと黙ってしまった。

あれには何か理由でもあったんだろうか。

それきり、何処となく気まずい時間が流れる。もしかして、これは触れて欲しくないことだったのかもしれないな。

彼女も少し空気が重くなったのが分かったのだろう。そんな雰囲気気を払拭する為にか、明るい声で自己紹介を始める。

「そ、そんなことよりも。

私達、よく考えたらまだお互いの名前も知らないんだよ。自己紹介くらいしなくちゃ。」

私、リリアス・ミルラっていうの。リリイって呼んでくれたらいいよ。ちなみに年は、ついこの間、十七歳になったばかりなの」

「俺は、ラトス・トールル。今年で二十歳だよ。よろしく」

「うん」

それにしても、苗字があるということは、リリイは貴族なのか。まあ、別に不思議なことではないけれど。

俺がそう考察していた間、リリイも何か考えていたらしく、俺に質問を投げ掛けてきた。

「あの、苗字があるってことは、ラトスさんは貴族なの？ 私、この国の貴族の名前はほぼ全部覚えてるつもりんだけど、トールルなんていう姓は聞いたことないよ？」

……………しまった……………。

師匠に、上の人間に素性がばれると面倒なことになるから、姓は名乗るなって言われてたのに、すっかり忘れてた……………。

俺が悶絶しているのを見て、リリイは少し不気味がしながらも、疑問を訊ねてきた。

「あ、あの、どうかしたの？」

うーん、まあ、別に一人にちょっとばれたくらいなら大丈夫だろう。これを知っている人間は、ほとんどいないはずだし。

そう考えた俺は、“トーリル”について少しぼかして説明する  
ことにした。

「い、いや、なんでもないよ。」

で、俺が貴族なのかどうかって話だったら、答えは否だ」

「え……？ でも、苗字があるんだよね？」

まあ、リリイが不思議がるのも無理はないか。俺だって貴族でもないのに、苗字持ちなんて他に聞いたことないし。

仕方がないので、俺はある程度だけ話してあげる。

「まあ、なんていうか、俺の一族ってちょっと特殊でさ。これは苗字っていうより、一族全ての総称みたいなものなんだ。だから、別に貴族って訳じゃないんだ」

この説明を聞いたリリイは、よく分からないって顔をしている。

うーん、まあそりゃあ、これだけの情報じゃあ、分からなくても仕方ないか。こっちとしては、事情が分からない方が都合がいいしね。

どうやらリリイも、一応はあれで納得してくれたらしい。なんとか助かったな。

「そう、なの。」

あ！ そんなことより、さっきラトスさんに襲い掛かってきた、あの男の人！ どうして突然倒れちゃったの？ ラトスさん、何かしたんだよね？」

……助かってなかった。

「お、俺は知らないよ。大方試験がもうすぐ始まるから、緊張してたんだろう。」

臆病な奴だなー」

もし、あれをやったのが俺だ、と何処かから漏れれば、俺が失格にされかねない。

それは結構まずいから、何とか誤魔化さなきゃな。

「でも、あれ確実にラトスさんが何かやってたよね？」

「うぐう……」

さすがにこれでは誤魔化せないようだ。当然だが。

さて、どうやって言い逃れようか、などと俺が思考を巡らせていたその時。ロビーのさらに奥へと続く通路から、やたらガタイのいい筋肉質な老人がやって来た。

周りが少しざわめき始める。どうやらあれが今回の試験官らしい。彼はそのまま受付に向かい、なにやら書類を受け取って、それを眺めている。

幸運なことにリリイも彼の登場に注目しているので、先程のことはうちゃむやにできそうだ。

なんて俺が安心してしていると、横からリリイが話し掛けてきた。

「ねえ、試験官の人が来たっていうことは、もう試験が始まるんだよね？」

「多分そうだと思うけど」

「そっか、緊張するなあ。」

ところでラトスさんは、どの大隊に志願するつもりなの？」

ん？ 大隊に志願する？ 何のことだろう。

俺は、聞き慣れない単語に、首を傾げる。まあ、一人で考えていても分かるとは思えないので、リリイに直接聞いてみることにした。

「その、大隊に志願する、ってどういう意味？」

「え……？ ラトスさん、もしかして知らないの……？」

なんだか、もの凄く驚いているな。そんなに有名なことなのかな？

それなら尚更、試験が始まる前に聞き出さなくては。

「ちょっと、さっきのはどういう意味なの？ 俺、試験のことについて、あんまり詳しくないんだ。だから、教えてくれないかな？」

リリイは、まだ驚きがさめやらぬまま、といった様子だったが、俺に頼まれて説明してくれるようだ。

呆れたような視線を俺に向けながら、口を開く。



「えつとね、ラトスさんも知っているとは思っただけど、この……」

「おい！ お前ら！！！」

うおっ！？ 誰だ？

つて、あああー……。

折角説明してもらってるのに、こんな大きな声を出すから、リリイがびっくりして説明終わっちゃったよ……。

俺が、そんな気の抜けたことを考えていた間に、周りの人達が妙に姿勢正しくなっていた。

本当に一体なんなんだろう……。

「おい！」

また何か言ってる。

「おい！ お前だ！」

そこのモヤシ！！ 話を聞いておるのか？」

ん？ 俺？ ていうか、モヤシって何だよ……。

若干不満はあったものの、怒鳴っているのが試験官だと気付いた俺は、大人しく彼の言うことを聞くことにした。

「あ、はい。なんですか？」

「なんですか、じゃないじゃろうが！！ さっきから俺が話をしているというのに、全く聞いていなかったじゃろう！！」

「たく、こんなんで大丈夫なのかのう？」

俺の返答に何か気に食わないところがあつたのだろうか。また俺に怒鳴つた老人は、何事かぶつぶつ言いながら、こっちを睨みつけている。

「だけど気に食わないのはこっちも同じだ。あいつだつてもしかすれば、あの時集落を襲つた奴らの一人かもしれない。」

「いや、疑いだしたらもうきりがないな。これは、また後で個人的に調べればいいことだ。今は忘れておこう。」

俺が、ちょうど自分の中でそう、折り合いを付けた時だ。俺のすぐ横から声が聞こえてきた。

「ね、ねえ、そんな怖い顔してどうしたの？　お願いだから、ここであの試験官に殴りかかったりはしないでよ。」

「今までずっと黙っていたりリイが俺に少し怯えたような表情で言ってきた。」

俺、そんなに怖い顔をしてたかな？　怯えられるとか、冗談抜きでちょっとショックです……。」

「ここは、にこやかに返答することにした。」

「いや、そんなことしないから。ただ、ちょっと気になることがあつたんだ。」

引き攣つた笑顔になつた気がする……。というより、これは確実

に引き攣ったかな。

そんな俺の顔を見て、リリィも引き攣った顔をした気がするが、まあ見なかったことにしよう。

「はあ。まあ、もういいじゃろ」

そんなやりとりを、苛々とした様子で眺めていたあの試験官が、ため息を吐いてこちらからふいつと顔をそらす。

ため息を吐きたいのは、こっちなんだが。

そして、彼はもうこちらを気にしないことにしたのだろう。

ロビーに集まっている受験者達に向かって声を張り上げる。

「お前ら！ 今から訓練スペースへ行くからついて来い！」

ここにいる全員が、それを承知したのを見届けて、あの試験官がロビーに来る時に通ってきた、さらに奥へと繋がる通路へと足を向けた。

「あ、ねえ、みんな行くみたいだよ。私達もついていかなきゃ」

俺達もみんなに追隨して、通路に入っていく。

その通路の中は薄暗く、あのロビーの華やかさが嘘のような汚さだ。

それに加えて、みんながこれからのことを想像して、緊張してい

る。全員、足取りが何処となく重いのだ。それが、この鬱屈した空間を、さらに重苦しいものになっている。

今からこんな調子だと、本番に失敗するのが目に見えるようだ。

まあ、俺としては、敵が少なくなるっていうのなら、一向に構わないけど。

そんなことを考えていると、いつの間にか通路の終わりが見えてきた。

外からの光が、通路の出口から中に入ってきているのを見て、居心地の悪い時間が終わりを迎えたことを悟る。

だって、すごく空気重いし。気まずかったし。

そして俺達は、とうとう外に出た。そこで俺が目にした光景。それは、建物の中とは思えない程に広い、土の地面で、円形に開けた空間だった。そこに天井は無く、周りを壁に囲まれているだけで、ほとんど屋外と変わらない。

これ、雨の日はびちょびちょになるよなあ。

俺が、そんなしょうもないことを考えていたその時。先頭を歩いていた試験官が、この訓練スペースの真ん中辺りに立ち、腰に手を当てる。

みんなは、今から試験官が何か言おうとしているのを察したのだろう。あの試験官に緊張した視線が集中していく。

そして、彼は大きく息を吸い、全員が固唾を呑む中、堂々と口を開いた。

「それでは、これより第三十二回、エインガルズ王国、王国騎士団入団試験を開始する！」

こうして、俺の目的への第一歩が踏み出されたのだった。

### 第三話 王国騎士団

「はあ！？ お前、そんなことも知らずにここへ来おったのか？  
本当に騎士になる気があるのか！？」

今、俺は試験官に怒られている。声大っきい……。

「おい！ ちゃんと聞いておるのか！？ まったくこれだから最近  
の若いもんは……」

そして長い……。いつまで、このめんどくさい説教を聞かなくて  
はいけないのだろうか。

そろそろ、うんざりしてきた。リリイは、遠くで知らん顔をして  
るし。

「はあ……」

「こらっ！！ 何を偉そうにため息なんぞ吐いておる！ そもそも、  
そんなことだから……」

ところで、何故、今俺がこんなことになっているのかというと、  
話は、この試験官が試験開始宣言をした、すぐ後に遡る……。

「ほら、さっさと大隊の希望が同じ奴同士で集まって、整列しろ！」

あのごつい老人が声を張り上げている。

みんながどんどん移動して、綺麗な列を作っていく。

「え？ だから、その大隊って何……？」

そんな中、俺は訳が分からず、ずっと同じ場所に立ち続けていた。

それもそのはずである。これはどうやら大事なことであるらしいのだが、ロビーにいた時、この試験官が急に怒鳴ってきたので、俺はリリイに話を聞きそびれてしまっていたのだ。

これはどうやら、もう一度リリイに話を聞く他なさそうである。

そんな結論に達した俺は、横を向いてリリイに話し掛ける。

「ちょっと、ロビーでの話の続きなんだけど……」

誰もいない。

え？ さっきまで、俺の横にいたのに。

気付いたら、リリイは俺の隣から消えていた。俺は彼女を探して辺りを見回してみる。

すると、しばらくして彼女を見付けた。他の受験者達と一緒に列に並んでいたのである。

「えー……。リリイは、俺がこのこと何も知らないって分かってる

はずだよな？　もしかして、見捨てられたのかな……？」

俺は、彼女の方を見ながら、若干落ち込んでみる。すると、俺が見ていることに気付いたリリイは、声を出さずに口を動かして、何かを伝えてきた。

それを何とか読み取っていく。

「えーと、お、ま、え、う、ざ、い………………。まじですか…………」

大ダメージだ……。流石にうざいとまで言われると、俺だって傷つく。

先程より大袈裟に落ち込んだ様子を見せていると、リリイは何か言いたそうな顔をこちらに向けてきた。そして何故か、急いでこちらにやって来る。

…。  
追い討ちをかけに来たのだろうか。もう、いじめないで欲しい…。

そんな馬鹿らしいことを考えていると、いつの間にか俺のすぐ目の前に来ていたリリイが、呆れたように言葉を投げ掛けてきた。

「あの、私そんなこと言ってないんだけど」

「え？」

「おまえうざい、じゃなくて、ごめんなさいって言ったんだよ？  
一体、どうやったならそんな間違いするの」



おお。どうやら、俺は彼女に嫌われてしまった訳ではないらしい。さっきのは、俺の勘違いだったようだ。

俺がそのことに安堵していると、リリイはまたこちらに少し呆れた表情を向けて、口を開いた。

「さっきは、もう試験始まるって言ってたから、私も余裕がなかったの。もう、ラトスさんがあんな悲しそうな顔するから、つい来ちゃったじゃない」

「だって、うざいなんて言われたら、誰だって傷つくだろう？ そういうこと、あんまり人に言っちゃ駄目だ」

「いや、だからそれはラトスさんの勘違い……」

ショックを受けた仕返しにちょっとからかってみた。まあ、あれは完全に俺の勘違いだった訳だけど。

そんな間抜けなやり取りをしているうちに周りの人達は、どんどん列に移動していく。

このままではまずいと思った俺は、急いでリリイに説明を頼む。

「っと、そんなことよりさっきロビーで話してたこと、ちゃんと教えてくれないかな？ その、希望する大隊ってなんのことなんだ？」

「えっとね、そもそもこの騎士団は……」

それは、これでやっと話が聞ける、と俺が安心した時だった。

「お前ら、何をしとる！ 早く並ばんか！！」

「まただよ……。またあの爺さん邪魔してきたよ。これは何の嫌がらせなんだ？」

流石の俺もこれには少し腹が立ってくる。あの試験官は本当に最悪のタイミングで怒鳴りつけてくるのだ。狙ってやっているとは思えない。

「ほら、さつさと向こうに行つて並んでい」

「ごめんね、ラトスさん。私もう並んでくるから、この試験官さんに話を聞くといいよ」

今度こそ本当に見捨てられた俺は、呆然とした気持ちでこの目の前にいる老人の顔を眺める。

毎回毎回邪魔をしてくるこの顔を見てみると、なんだか無性に腹が立ってきた。しかし、ここで問題を起こして失格にでもされてしまったら、全てがお終いだ。ここはぐつと我慢することにした。

そして、先程リリイに言われたことを思い出してみる。彼女は大隊とか何とかのことを、この試験官に聞けと言っていた。

それは、あまり得策とも思えないのだが、今はそうする以外に方法が無さそうだ。仕方がないので、彼に聞いてみることにした。

「あの」

「ん？ なんじゃ？ お前も早く並ばんか」

「いや、ちょっとあなたに聞きたいことがあるんですけど」

「うむ、なんじゃ？ 言うてみい」

この反応は以外と大丈夫かもしれない。

よし、ここは思い切って聞いてみよう。

「あの、大隊って何ですか？」

「……………。はあ!？」

そして、話は現在に戻る。

こうしてこの試験官の逆鱗に触れてしまったらしい俺は、退屈な説教を延々と聞くことになってしまった。

しかし、その説教もようやく終わった。試験官は、ずっと言葉を紡ぎ続けていた口を閉じ、無言で質問を催促している。

この人は、何だかんだで面倒見がいいのかもしれない。根拠は無いが、集落を襲った人間の中にこの人は入っていない気がする。

そんな考察を長々と続けている間、試験官は俺が話し出すのを黙って待っていたが、流石にもう待ち切れなくなっただらしい。

言葉で直接質問を促してきた。

「それでお前は一体、大隊の何が分からんのじゃ？」

何が分からないのかと聞かれると……。

「えっと、何一つ……？」

「はあ。お前、本当に何をしに来たんじゃ……。

まあ、いい。みなが待っておるし、ここは手短かに説明するぞ」

彼はもうこのことについて諦めたのか、もう怒鳴られるということは無かった。

そしてとうとう、王国騎士団についての説明が始まった。

「そもそも、この国には国王の近衛師団を除くと、王国騎士団以外の軍というものは存在せんのだ。だが、やはりそれだけでは国を守るには、少し心許ない。そこで、本来なら槍や剣をもって、直接敵と刃を合わせるはずの“騎士”のみで構成されるべき騎士団を、幾つかの大隊に分けて、それぞれに役割を振り分けていったんじゃ」

どうやらこの国の軍は、ほぼ王国騎士団のみで構成されているらしい。たしかに、他の軍の名前などは聞いたことが無かったし、それは本当なのだろう。

でも、そんなこと俺は知らなかったぞ？

もしかすると、俺はそうとう無知なのかもしれない。師匠は俺に、

勉強から戦闘まで様々なことを教えてくれたけれど、王国騎士団については随分おおまかにしか教えてくれていなかったらしい。

帰ったら文句言ってる。

俺がそんなことを思っている間にも、話はどんどん進んでいく。

「そして、その大隊というものは全部で三つある。

近距離戦闘を一手に引き受ける、本来の定義通りの“騎士”達が所属する、“騎士大隊”。

次に、主として遠距離戦で活躍することの多い“魔術師”達が所属する、“魔術師大隊”。

そして最後は、戦闘で傷付いた団員達の怪我を治療したり、補給物資の運搬などを担う、

“戦闘扶助大隊”。

まあ、近距離戦闘もできるし、魔術も使えるというような奴は、騎士大隊でも魔術師大隊でも好きな方に入ればいい。

さあ、これが王国騎士団の簡単な構成じゃ。分かったか？」

なるほど。これで、リリィや試験官の言っていたことの意味は分かった。

ここで問題なのは、俺がどの大隊に志願するかということなのだが……。今聞いた話によると、近距離戦闘ができて魔術も使える奴は、騎士大隊か魔術師大隊か、どちらか好きな方を選んでいいらしい。俺としてはどちらになっても構わないが、できるだけ上の人間を探る為に、上層部との繋がりが深い方がいいな。

しかし、生憎、無知な俺にはどちらがそれに向いているかなんて分かりません……。よし、試験官に聞いてみよう。

「あの、騎士大隊と魔術師大隊、どっちが団員達の中で高い地位にあります?」

「ん? そんなことを聞いてどうするんじや」

まあ、そりゃあ不思議に思うよな。うーん、どう説明しよう。正直なことを言ったら、なんだか俺の人間としての価値が下がってしまいそうだが……。

「いや、俺、魔術と剣技、どっちも使えるので志願する大隊を選ぶ参考にしようと思って……」

俺がそう言った途端、試験官の顔から表情が消える。

まずい……。やっぱりこんなこと言っちゃ駄目だったか……?」

今更後悔したところでもう遅い。次は一体どれ程怒鳴られるのか、と俺が戦々恐々としていると……。

「がはははははー!」

笑われた。

「ぶわっはっはっはっ!」

大爆笑されている。

訳が分からない。俺の発言のどこに爆笑する要素があったのだろうか。まあ、叱られるよりはいいが。いや、でもこれはこれで不気

味だな……。

「あの、どうして笑ってるんですか？」

どうしても分らないので、本人に直接聞いてみる。すると、意外な答えが返ってきた。

「いや、笑ってしまったって悪かったのう。こんなに正直に物を言う奴は久しぶりに見たものだからからの。大抵の新人は上のもの機嫌をとろうと、お世辞ばかりなんじゃ。その点、僕はお前の方に好感を持てるぞ」

……。爆笑された理由は分かったが、今この試験官が気になる発言をした。さっきの言葉からは、彼がかなり高い地位の人間だということが読み取れる。

彼があ那时的の下手人だとは思えないが、後々詳しく調べる必要がありそうだ。

俺が自分の考えに没頭していると、試験官に突然声を掛けられた。

「おい、急に黙っちまってどうしたんじゃ？」

うん、あまり人との会話中に物を考えるべきではないな。考え事に集中しすぎて周りが見えなくなってしまっ。

俺は、そう反省して試験官の質問に答える。

「いえ、ちょっと考え事をしてただけですよ。すいません」

「そうか。まあ、それじゃあ大隊についての説明も終わったし、お前も並んでこい。もう、全員並び終えて待つておるぞ」

そう言われて皆の方を見てみると、たしかに全員並び終えているようだ。しかも、その全ての人達が、試験開始を遅らせている俺を睨みつけている。

かなり怖い……。

この無言の圧力に耐え切れなくなった俺は、急いであの列に加わるのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4427y/>

---

トールルの鐘

2011年11月20日20時06分発行